

なんで「多文化共生」を考えるんですか？

松宮 朝

なぜ「多文化共生」？

「なんで『多文化共生』を考えるんですか？なんでそんなに一生懸命になれるんですか？」

これは、2007年度前期の国際福祉論という授業時に実施した感想レポートに書かれていた質問である。授業では西尾市での調査研究の概要を伝え、地域における「多文化共生」の可能性について議論していた。西尾市で出会ったブラジル人から教えられたこと、そして、外国人を排除することなく地域で受け入れようとした地域住民の実践（松宮・山本、2008）をもとに、地域という場での「多文化共生」の具体的なイメージを伝えようとしたつもりだった。それに対して多くの学生は、それぞれの生活史の中で埋もれたままになっていた外国人との関係の記憶、自身の外国人に対する偏見、西尾の事例が特殊ではないかといった疑問や、今後の「多文化共生」への期待などを書いてくれていた。それらを一喜一憂しながら夢中になって読みふけていたのである。

そんな中で、「おっ？」と不意をつかれ、最も強い衝撃を受けたのが冒頭の学生の質問である。

「なんで？」と言われても。

この、一見素朴に見える質問に対してひどく戸惑い、それ以降しばらくの間、なか

なかうまくこたえることができずに悩むことになった。なぜなら、それはあまりに「自明」なことだったからだ。正確に言えば、あえて自分で問わないままあたりまえだと考えていたことであつたからだ。もちろん、外国人に対する様々な差別や排除の現実がある以上、ナイーブに「多文化共生」を語ることはできない。しかし、現実的なレベルの問題を認めた上で、少なくともこうした差別や排除を乗り越えるための理念としての「多文化共生」は、一定の同意を得ている状況と言えるのではないだろうか⁽¹⁾。実際、「多文化共生」は近年の政府の政策理念の1つであり、各自治体も施策の理念として掲げつつある（松宮・山本、2008）。

私自身、これまでの調査の中で研究の目的は何か？と問われた際には、この「多文化共生」という理念を前提に回答していたように思う。文化的差異を認めつつ、政治経済的平等を実現しようという理念自体は、多くの人に対して理解を得ることができそうな研究目標だと考えていたからかもしれない。つい先日もこのような出来事があった。調査先で「あなたたちの研究の目的は何か、国に働きかけることか？」と問われた際に、私は「地域での調査を積み重ね、まあ、多文化共生の施策につながるように、行政にも働きかけようとは思っています」とこたえていた。また、ある外国籍住民の集住地域で郵送調査を実施した時のことで

ある。外国人に対する意識を尋ねた調査票に対して、調査対象者となった方から電話で「おまえたちは外国人の味方なのか」、「外国人出て行けとなぜ言わないのか」と詰問された際にも、「多文化共生」を目的とした研究の趣旨を説明させていただいた上で、調査への協力をあらためてお願いした。

簡単に言ってしまえばこれは非常にわかりやすい回答ではある。しかし、おそらく、これでは冒頭の学生の質問に対するこたえになっていないだろう。「多文化共生」を理解しない偏見を持つ人を困ったなど言い、偏見に対して眉をひそめるおまえはいったい何者か？「多文化共生」を嘯くおまえ何なのか？

あまりにも深読みしすぎているかもしれないが、授業時に投げかけられた質問の意図は、むしろこの点にあったのではないだろうか。少なくとも私はそのように受け止めていた。その後の授業や、話す機会が与えられた時にはこの点をいつも意識していた。そこで思い悩みつつ、自分なりに語ったことを書いていくことにしたい。

なぜ、「多文化共生」を語るのか？この質問に対してまともにこたえるためには、どうしても自分の経験（その多くはあまり楽しくない経験だが）を掘り起こす必要があった。

「多文化共生」を語ることへの抵抗感

多文化共生研究所の設立を記念した雑誌の創刊号のエッセーとしてはふさわしくない、空気を読めていないことを書くことになるかもしれない。しかし、「多文化共生」をあっけらかんと明るい口調で語ることに

はどうも抵抗感がある。特に冒頭に紹介した学生からの質問を読んだからは、その思いが強くなっている。

そもそも、私が大学院時代を過ごした社会学の講座では、「文化」による説明を嫌うところがあった。様々な社会現象の説明を、何でもかんでも「文化」によって安易に説明することになってしまうというのがその最大の理由だったように思う。安易に「文化」として語るな、そして「文化」以外の変数によって説明した上で「文化」を使えということ強くたたき込まれたのだ。それには一定の正当性もあるように感じている^②。

また、このような抵抗感があるからといって、何も「多文化共生」について、私自身が魅力を感じていないというわけではない。むしろ全く逆だ。これまでの西尾市でのフィールドワークでの経験はその魅力にひたすらとりつかれた経験と言っている。

このような研究の舞台裏の話を書く場合、通常、調査での楽しい経験を語るものだろう。確かに、ここで語りたい気持ちになるのはそういう思い出だ。夏の真っ盛りに調査票の回収に一軒ずつまわっている時に冷たい飲み物をごちそうしてくれたことや、歩くと40～50分かかかる最寄り駅まで車で送ってもらったこともたびたびだ。また、いったい何度おいしいブラジル料理をおなか一杯になるまで食べさせてもらったことだろう。

じゃー、そういう話を書きなよ、とも思う。お世話になった人たちへの感謝の気持ちをこめて、強く思う。

しかし、ここで書くべきは、むしろ苦いこと、ひっかかっていることの方だという

気がしている。「多文化共生」を語ることの抵抗感を自分の経験に引きつけつつ乗り越えることが必要だと考えるからだ。

ドイツの記憶

いろいろ悩みながらも、その後の授業で話したことは、自分自身が「多文化共生」を全く実践することできなかつた苦い記憶である。この記憶は、2001年から西尾市でのフィールドワークを続ける中で少しずつ浮かび上がってきたものではあつたが、研究する自分の意識とは切り離されたままだった。しかし、授業で語っていくうちに、その意味とつながりをより明確に意識させられることになった。(したがって、当然、想起している時点での自分の関心の文脈から再構成された「記憶」である。)

1981年から82年にかけて、父の仕事で1年間、当時の西ドイツ、シュトゥットガルトで暮らしたことがあつた。今、思い返してみれば、町並み・景色の美しさや様々な楽しい記憶が浮かび上がってくる。なんと、私たちが引っ越して来たその日から、子ども連れの日本人一家に対して、こちらからお願いしたわけでもないのに見ず知らずの近所の人たちが次々に生活に必要なものを持ってきてくれたのだ。おそらく初めて目にする日本人に対して、簡易ベッド、ソファを運んできてくれた。さらに、夏だったにもかかわらず、冬になると絶対に必要だと言って子ども用のジャンパーまで持って来ていただいたことに家族全員でいたく感激していた。びくびくしながらの西ドイツでの生活の第一歩として、そんな「多文化共生」のお手本のような出来事に出会

つたわけだ。その後もたびたびこのような暖かい歓待を受けたことをまずは述べておきたい。

しかし、これは地域での、そして大人の世界での話だ。家を離れた子どもの世界では、かなりつらい経験が待ち受けていた。小学校2年生、8歳だった私は現地の小学校に編入する。ドイツ語など全くわからない中で、来る日も来る日もひたすら黙って過ごしていた。それは3ヶ月くらい続いた。不思議なことにその時期の記憶はほとんどない。あまりにもつらい記憶だったからかもしれない。唯一記憶にあるのは、私と同時期に編入していたもう1人日本人の男の子が、ある日突然教室を抜け出し奇声を発しながら狂ったように校庭を走り回った事件だ。彼も私と同じような精神状態であり、とうとうそれが限界まで来て爆発したのだろう。その光景を見て、私は不思議と冷静になった。自分より早く狂う人間がいたと。自分の肩から力が抜ける感触を覚えている。

学校でいじめられたことはなかったように思う。では、何が一番つらかつたのだろうか。それは大人の生活世界と子どもの生活世界のギャップである。両親はドイツ社会のすばらしさを絶賛していたが、子どもだった自分はその裏にひそむどす黒い部分をいくつも経験していた。

こんなことがあつた。通学途中の地下鉄の駅で、少年3人ほどが私を取り囲み、両手でまぶたを引っ張りつり目にした格好を見せつけながら、「チャイニーズ、チャイニーズ、ハハハ」とはやし立てたのだ。私は「チャイニーズ」ではなく「ヤパーナー(日本人)」だと言うと、彼らはつまらなさそうに立ち去っていった。この経験は、子ども

心に屈折した気持ちを引き起こさせた。いったい何なのだろう、この言葉は。屈辱が与えられるだけ与えられ、しかもその言葉に対して反論する機会さえも奪われてしまっている。自分が黄色人種であることを意識させられた初めての経験であり、差別に対する憤りを初めて思い知らされた経験であると同時に、自分が中国人でないことと弁明したことに対する罪悪感も抱くこととなった。そしてこの話をして、「ドイツは日本と違って差別がない」⁽³⁾と語り、子どもの世界の現実を理解しようとしないう両親に対しての憤りの感情は強まるばかりだった。

私自身はこうした経験や、スペイン人の同級生が（おそらくスペイン人だという理由で）いじめられているのを見たりするうちに、いわゆる「ドイツ人」ではなく、近所の工事現場で働くトルコからの移民に親近感を感じていた。これを「民族的」な感情の芽生えと言っているのかはわからない。しかし、確実に自分の何かが変化していたのは確かである。こうした状況に対する苛立ちから、私は帰国直前に後味の悪い事件を起こしてしまった。それはスペインで開催された西ドイツ対イタリアのサッカーワールドカップ決勝戦を、近所のドイツ人のご家庭に誘われて観戦していた時のことだ。その日、私は普段と変わりなく、ドイツ人の家庭にお邪魔したことと思う。私たち以外にも数家族招かれていて、テレビの画面に映し出された西ドイツ代表に声援を送っていた。結局3対1で西ドイツは破れるのだが、当然その場のすべての人間は西ドイツを応援していた。

私は特にサッカーには関心がなかったの
で、遠巻きに観ていたように思う。どちら

かといえば退屈に思っていたくらいだが、ふと画面に目をやると、それは、黒い髪のチームと金髪のチームの戦いのように見えてきた。黒い髪のチームであるイタリアはこの場では「敵」であり、イタリアが得点するたびにその家にいた人々は罵声を浴びせていた。ここで、自分の気持ちは驚くほど荒々しくなった。それまで自分が受けてきた屈辱のようなものが一気に体中を駆けめぐり、気がつくやうに、黒い髪の「敵」の一員として、イタリアを応援していたのだ。私が大声でイタリアの応援をするたびに、場はしらけ、気まずい雰囲気になった。ここでも自分は空気が読めていなかったのだろうか。空気を読めなかったのではなかった。子どもなりに、その場がどういうものであるか理解していたつもりだ。そして、自分がしでかすことによって引き起こされるであろうひどい状況も理解していた。あえて空気を読まなかったのだ。そして思った通りにその場の空気が変わり、私は満足だった。自分は、屈折した民族主義者のようなものだった。イタリアを応援していたが、それは単にドイツでの経験に対する感情の裏返しだ。ドイツというものに対して、両親のドイツ経験の欺瞞に対して自分は復讐した気になっていただけだった。そしてその場にいた、私たち家族が大変お世話になっていた人たちの気持ちを台無しにしてしまったのだ。

多層的、多面的な「文化」とのつきあい方

そんな屈折した民族主義者のような気持ちをいただいたまま帰国した私を待ち受けていたものは、また別の現実である。日本

に戻れば元の生活の通り、そのままびったりおさまるといふ訳にはいかず、全く予想もしていなかった経験をすることになる。

その最大の衝撃はなじみであったはずの学校での経験である。小学校2年生の一学期まで通っていたのと全く同じ学校に一年ぶりに行ってみると、そこはまるで別世界だった。一言で言えば、自分に向けられるまなざしが全く違っていた。そこで私は、ドイツ語をしゃべれと言われたり、「ドイツ人」などと言われたりして、あれほど自分が嫌悪していたドイツ的なものを負わせられたのだ。そうしたまなざしを柔軟に処理できるほど強くはなかった。私はひたすらドイツでの一年間の痕跡を抹消し、日本の学校文化に合わせようとしたと思う。当時はやっていたガンダムのプラモデルを必死に研究して仲間に入れてもらおうとした。それを見た母親は、ドイツでは創造的で芸術的な遊びをするのに対して、日本では画一的な遊びをするという語りで私を非難した。1年間のブランクでとてつもなく下手になっていた野球では、みんなが一番いやがるキャッチャーをやってなんとか仲間に入れて貰った。「日本人」の自分が「日本」に同化しようとしていたのである。適応することに必死だった。

このように、こんな私のつまらない経験を引きずり出してきても、国と国を越えること、別の文化圏で暮らすこと、その中で経験する「文化」の違いは、単にいろいろな「文化」があって、一緒に認め合って、仲良くしようと言えるほど単純なものではないことがわかるはずだ⁽⁴⁾。あえて大雑把に言ってしまうと、大人の経験する「文化」、子どもの「文化」、学校での「文化」という

ものがある。それに「国」、「民族」のようなものにまつわる「文化」が絡み合う。その場その場の、文脈に応じて様々な形で立ち現れ、次々とぶつかってくる「文化」にどのように立ち回るのかの判断を迫られるのだ。もちろん、その中には「文化」という概念でくることができないものもあるだろうが、あえて「文化」としてとらえるにしても、こうした多層的な、多面的な「文化」を1つずつ理解し、対処し、そうした「文化」とのつきあい方を考えていくことが必要になってくる。

そんな状況において、「多文化共生」という言葉はどのような意味を持つのだろうか。当時の自分はどのように語ったのだろうか。何を語りえたのだろうか。日本とドイツのどちらにも属することができずに、また、そこから自由になることもできずに、周囲からのまなざしを意識しつつ生きていくこと。家族との関係においても、様々な「文化」の困難が増幅されていく。多様な「文化」の「共生」はひどくつらいもののように思えたはずだ。

というわけで、なぜ「多文化共生」を考えるのか？

これまで書いてきた私自身の経験と、「ブラジルでは『日本人』と言われ、日本では『ブラジル人』と言われる」との経験が語られる日系ブラジル人の境遇とを重ね合わせるつもりは全くない。ドイツで外国籍児童に対する教育支援は、私自身、全く受けたことはなかったが、その意味では日本の学校でブラジル人の子どもたちと重ね合わせることもできるかもしれない。しかし、

それはそれで問題だろう。なによりその状況が異なっているし、移住した文脈も全く異なっているからだ。このような自分自身の経験を投影するものではないし、ここでの目的は単に重ね合わせることではない⁽⁵⁾。と同時に、こんな経験をしている自分はあなたたちのことがわかるのだ、と口が裂けても言うことはできない。なにしろ、私はまわりの友だちが私のドイツでの経験を忘れるのと同時に、自分自身の周囲に対する身構えも消え失せてしまったからだ。

ここでのねらいは全く逆で、「多文化共生」を語る前に、その問題はどこにあるのか、そこでの「文化」とはどのように経験され、「共生」はどのように可能となるのかという点について、根本的なところから問い直していくことにある。そこでは自分自身の「多文化共生」に対する経験と、それに関連する認識が問われることになるように思う。自分はどれだけ見えているのか、見えていなかったのか。授業や調査の現場で、「多文化共生」を安易に語ってしまうことはできなくなる。「多文化共生」を美しい響きを持った理念としてではなく、それを生きる問題としてとらえかえすことで、自分自身の何かをつき崩してしまうリスクを生み出してしまうからだ。

しかし、このような「多文化共生」に対するかまえ方を単にリスクとしてのみ考えるべきだろうか。むしろ、安全ではあるが耳障りのいい無意味な概念としてではなく、問題の本質を理解し、問題を乗り越える実践的な概念として鍛え直す可能性を見ることはできないだろうか。

この点について、北海道での大学院時代にお世話になった先輩である宮内洋氏（現

高崎健康福祉大学短期大学部准教授）は次のような指摘を行っている。「日本社会で『共生』について語られる言説の大半の前提となっている『日本人』と『外国人』との関係」において、「《他者》は《自己》とは何ら接点のない《他者》としてしか存在せず、《自己》にとっては何ら影響を与える存在ではない。この場合の《他者》とは、現在の包括的な世界には存在するけれども、《自己》が認識でき得る世界には侵入してきてはならない存在である。ただし、この《他者》の侵入によってもこの《自己》の世界が変容しない保証があれば、その《他者》は出入りが自由となる」（宮内、1995:237）。この点は、「共生」、あるいは「多文化共生」という言葉がなぜ、耳障りがよい言葉として響くのかを考える上で重要だろう。自分自身の立場が安泰であって、様々な「文化」と出会っても何も揺るがない保証があれば、「多文化共生」など簡単に語ることができてしまうのだ。授業での私自身の「多文化共生」の語りにもどこかそうした響きがあったのかもしれない。もしそうだとしたら、全く意味のない表面的な「多文化共生」を語っていたことになる。そして、もう、そのように語ることはしたくない。

このように、冒頭に紹介した学生の質問は、少なくとも私自身の「多文化共生」について語る口調を変えさせることとなった。それによって、余計に学生を混乱させてしまったことかもしれないが、心地よく安心した立場ではなく、あえてぐらぐらした立ち位置をそのまま語っていくことにしよう。これが、学生の質問に対するこたえにはなっていないかもしれないが、「多文化共生」

を考える上で重要な点だと考えている。まだ、これからの課題がほとんどだが。

というわけで、「多文化共生」を語る前提を問い直しつつ一歩ずつ考えていくことができるような、率直な議論ができればいいと思っている。多文化共生研究所での出会いも、そのチャンスだと楽しみにしている。

注

(1) もっとも、「多文化共生」に対する批判が活発に展開されている点にも注意しておきたい。これらは大きく分けて2つの批判にまとめることができる。第1に、倫理的批判というべきもので、「多文化共生」はマイノリティの側からのものではないという批判(ハタノ、2006)や、マジョリティの側が提示する「共生」のあり方に対する批判(樋口、2005)である。第2に、「共生モデル」そのものに対する批判があり、「共生」モデルに適合しない現実から目をそらし、「文化」にのみ視点がおかれることによって、構造的な問題を見失う(同上、2005)という根本的な問題も提起されている。この点については、松宮・山本(2008)で議論している。

(2) 大月隆寛氏(2004:75)は、「異文化」というもの言いであらえようとすることにに対して、こんな警鐘をならしている。「いずれにしても、そういう眼の前の具体的な『違い』の由来や理由を説明するのに、なんでもかんでもいきなり早上がりに『文化』の方に帳尻を預けてしまって本当にいいのかどうか、っていうのは大いに問題ありなんだよね。だって、今の日本語の枠組みじゃ、『文化』って言った瞬間から、人間の社会を規定するそれ以外の水準、

たとえば政治や経済や歴史なんて水準の現実がなかったことになってしまうのが常なんだから」。

(3) これはどうやら一部で「常識」として流通しているようだ。帰国した後、私が通った小学校に、ドイツの教育がいかにすばらしいか、いじめをなくしているのかを教えてくださいという教師がいた。当然のことながら、ひどく複雑な気持ちになった。

(4) 近年の文化多元主義に対して新原道信氏は、「多元的であること、異質であることの立体性、多方向性は、静態としてはとらえられない。いろいろなものがあることを認めようと判断した時点で他者理解が止まるという側面がある」(新原、1997:212)とする。そして「いろいろなものがあり、その違いはなかなか乗り越えられないが、どう違うのかを理解しようとしたり、自分をわからせようとする過程の内に存在する動的な関係付け、たゆまぬ異質性の認識過程」(同上:212)が重要な意味を持つことを主張する。

(5) 「社会科学における誤りの源泉のひとつは対象に対する〔社会学者の〕関係をチェックしないことであり、その結果分析のなかに分析されざる関係を投影してしまっていることです」(ブルデュー／ヴァカン、2007:101)。

参考文献

- ・大月隆寛 2004 『『異文化』なんてもの言い、今すぐ忘れちまいなよ』、『全身民俗学者』夏目書房
- ・新原道 1997 「“移動民”(homo movens)の出

- 会い方』『現代思想』25(1):212-218.
- ・ハタノ・リリアン・テルミ 2006「在日ブラジル人を取り巻く『多文化共生』の諸問題」植田晃次・山下仁『「共生」の内実』三元社
 - ・樋口直人 2005「共生から統合へ」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の见えない定住化』名古屋大学出版会
 - ・ブルデュー・ピエール／ヴァカン・J・D・ロイック（水島和則訳）2007『リフレクシブ・ソシオロジーへの招待』藤原書店
 - ・松宮朝・山本かほり 2008「地域住民としての外国人をめぐって」、阿部亮吾・岩渕功一・翁川景子・松宮朝編『移民の現在／多文化共生の未来』カルチュラル・タイフーン in 名古屋 2007 セッション報告書
 - ・宮内洋 1995「繋がらない個人のために」『北海道大学教育学部紀要』65:233-244

著者プロフィール

松宮朝 (MATSUMIYA Hajime) 文学部 (社会福祉学科) 准教授 社会学・社会調査法

■略歴

- 1998年3月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了（行動科学修士）
- 2000年3月 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程中退
- 2000年4月 北海道大学大学院文学研究科助手
- 2001年4月 愛知県立大学文学部講師
- 2003年12月 博士（文学）（論文題目『地域形成メカニズムの変容と「内発的発展」に関する社会学的研究』）

■これまでの研究

北海道では農村地域の「内発的発展」をテーマにフィールドワークを続けてきました。愛知に来てからは、西尾市でのブラジル人を中心としたニューカマー外国籍住民の増加と地域再編をテーマに調査研究をしています。近著は以下。

- ・「北海道農村地域形成の変容」『現代社会学研究』13:99-116. 2000
- ・「北海道農村地域の内発的発展」『日本都市社会学会年報』18:67-81. 2000
- ・「愛知県西尾市におけるブラジル人の生活実態とその定住化」『社会福祉研究』5:67-74. 2003
- ・「外国籍住民の増加と地域再編（2）」『社会福祉研究』6:45-56. 2004
- ・『「ニューカマー」の子どもたちへの地域教育支援—愛知県西尾市の事例から—』『愛知県立大学文学部論集（社会福祉学科編）』53:169-186. 2005
- ・「ブラジル人集住都市における日本人住民の意識(2)」『社会福祉研究』8:37-46. 2006
- ・「地方都市におけるブラジル人住民の増加と地域再編過程」（共著：山本かほり・松宮朝）『多文化共生研究年報』3:3-27. 2006
- ・「愛知県西尾市「日本人」住民意識調査から」『社会福祉研究』9:57-69. 2007

■これからの研究

これまでやってきた地域の「内発的発展」に関する研究と西尾市での「多文化共生」に関する研究とは、根本的なところでつながっている気がしています。院生の時以上にフィールドに出かけ、さらにこの問題を追求したいと考えています。

■「共生」について

2001年に愛知県に来て以来、山本先生に愛知県西尾市の研究に誘っていただいたのが縁で、その後どっぷり西尾での調査研究にはまっています（写真）。自分の研究だけでなく、休日の生活の大半が西尾での生活になっています。そんな中で「共生」について考えること、そして研究所に期待することを文章にしてみました。



西尾市でのシュハスコ（バーベキュー）、中央が本人